



AJEL

日本ラテンアメリカ学会 会 報



AJEL

1996年5月25日

No. 57

1. 第17回定期大会・総会
2. 研究部会報告
3. 事務局から

1. 第17回定期大会

初日午後には総会を開催へ
6名連記で理事選出選挙

学会の第17回定期大会が6月8日(土)、9日(日)の2日間、大阪の国立民族博物館(吹田市千里万博公園内)を会場に開催されるが、総会は初日8日の午後3時15分より行われる。総会では、事業報告や決算予算等通常の案件のほか、理事の12名(現行10名)への増員、LASSA会費納入代行の取り止め等の議案が予定されている。

引き続き理事および監事の選挙が行われ、4時半からの記念講演終了後に選挙結果が発表される手筈である。さらに2日目の9日午後0時半から新理事による第1回理事会が開催され互選によって理事長を選出し、同日午後のシンポジウム直前に行われる新理事長の挨拶によって新執行部が誕生することになる。

今回の理事選出選挙は、会則および理事選挙規則改正後初めて実施されるもので、これまでに比べ若干時間がかかると想定されている。選出方法は6名連記の投票となり、このうち3名については東日本、中部日本、西日本の3ブロックの被選挙権者から各1名記名

する。残り3名はブロックにかかわらず自由に記名することになるが、選挙管理委員の説明に十分気をつけていただきたい。

第17回定期大会は、2年に一度の理事改選期に当り、2期務めた山田理事長ほか5名の理事が退任する。改正会則および規則によると、会員のうち連続2期理事を経験したものは次の2期(4年間)被選挙権を失うことになる。

なお懇親会は8日午後6時10分より、民博レストランで行われる。会費は5000円(学生会員4000円)。

研究発表は8日午後1時から3時までに3分科会が、また9日午前10時30分から12時30分まで同じく3分科会が予定されている。

記念講演はコレヒオ・デ・メヒコのOmar Martinez Lagorreta 教授によるAPEC and Latin America が8日午後4時30分から、さらにシンポジウムは西島章次会員の司会による「ラテンアメリカの地域統合」が9日午後2時10分より企画されている。

事務局より

6月8日開催の第17回定期大会で「新会員名簿」を配布する予定です。このため事務局に連絡のあった最新時点での住所変更は、「新会員名簿」に盛り込みましたのでそちらをご覧ください。

2. 研究部会報告

○東日本部会

1996年3月6日(水)、早稲田大学において研究部会を開催した(出席者17名)。谷洋之氏の司会のもとで、今春修士論文を提出されたばかり5名の大学院生の報告について、1時半から5時半まで長時間にわたって活発な議論が行なわれた。5報告のうち3本が社会的アプローチからの分析で、政治学、文学が1本ずつであった。日本のラテンアメリカ研究においても社会史がひとつの潮流になっているようである。報告の要旨は以下のとおりである。(畑 恵子)

○第1報告：チリ北部硝石労働者の

社会的結合に関する一考察－1907年

イキケのストライキをめぐる一

大久保英子(東京外国語大学・院)

本論文は、従来のチリ労働運動史研究のなかの階級史的かつ偏狭でナショナリスティックな歴史観によって形づくられてきたチリ北部硝石労働者像に対し、第1に、労働のみならず衣食住をも含めたあらゆる生活の場をもって生きる人間としての、第2に、太平洋戦争(1879-1883)までペルー、ボリビア領であった北部硝石地帯の住民としての、新たな硝石労働者像を提示することで、階級的な眼差しを修正し、チリ史という枠組みを相対化しようとする試みである。対象はチリ労働運動研究史の「輝かしい労働運動」の神話の象徴的事件であった1907年のイキケのストライキに参加した硝石労働者とした。近隣の国境を越えた硝石労働者の連帯と、国家意識が明確でなかったこの地を単一のチリ国民国家化の方向へ導く分岐点としてのストライキの意

味を踏まえ、硝石地帯の住民としてのアイデンティティが形成される場としての社会的な結びつきがどのように形成されたのかを考察した。

○第2報告：19世紀末のチリ農民層

－なぜこの時代にチリに農民反乱は おきなかったのか－

中西三紀(東京外国語大学・院)

今世紀の半ば以降、特に1960年代以降、チリではその歴史上初めて農民運動が大きく高揚した。しかし、19世紀の後半から今世紀初頭にかけてのチリでは、他のラテンアメリカ諸国とは異なり、こうした兆候はほとんどみられなかった。修論においては、19世紀末のチリ中央部農村地帯における農民反乱および農民運動の不在を、農民層のおかれていた状況と、この時代のチリの社会構造の分析を通じて明らかにし、さらに、その後のチリ農村部の変動への予備的知識を得ることをその目的とした。

結論部分においては、20世紀の農民反乱を分析しているウルフの著作を参考に、またその後の革命において大きな役割をはたしたサパタの農民運動との比較を通じて、19世紀末というチリ近代化の胎動期と、チリ農民の歴史が、この時代どのように彼らを農民運動もしくは反乱へと導かない方向へと作用していたのかを明らかにした。

○第3報告：コスタリカの政治発展

－「民主体制崩壊」モデルによる 内戦の分析－

尾尻希和(上智大学・院)

本論文では、コスタリカの内戦とその後の安定化過程をリンスとステパンの民主体制崩壊モデルによって分析した。コスタリカの場

合、体制崩壊は反体制野党の武力蜂起によってもたらされたが、それを招いたのは反体制野党の機会主義的政策に加え、政府の無能力と非寛容の態度であった。反体制野党の武力蜂起により政府軍は敗北し、反体制野党による暫定統治が行なわれることになった。

新体制では各政治アクターの役割が変化した。反体制野党が内戦後は政権与党に衣替えし、旧体制での政権与党は反体制野党に転じた。準忠誠野党であった保守派は真の忠誠野党になり、新体制の支配政党と協力して体制の確立に貢献した。この進歩派と保守派との融和政策が新体制の安定に大きく貢献した。また、融和によって選挙制度改革も成功し、進歩派と保守派の間の政権交代も実現した。こうして新体制はその正統性を確実なものとし、その後、旧体制勢力が新体制に吸収されたのである。これによりコスタリカは内戦以前よりも強固で安定した民主体制の確立に成功した。

○第4報告：メキシコ現代小説の転換点

—ヤニェス、ルルフォ、フエンテスの
試み—

寺尾隆吉（東京大学・院）

イスマノアメリカ小説は、1940年前後から約20年間にわたって、その後の「ブーム」の時代へとつながる、大きな質的転換期を経験する。イスマノアメリカの現代小説は、1910年代後半から登場する写実性の強い一連の小説群をその出発点としているが、この時期の作品はいずれも、現実世界の模写、作者の信念の表明というレベルを超えておらず、中に含む情報や作者の主張、エキゾチックな情景描写以上の価値を持つものではなかった。

これに対して、サバト、オネッティ、カル

ペンティエールといった「新しい小説」の担い手たちは、このような小説のあり方を批判し、むしろ小説を主観の表現、内面世界の探究の場と考えるようになった。彼らは、自分の主観的世界に登場人物を送り込み、登場人物の助けを借りて自分自身の内面世界を客体化することで、これに接近しようとしたのである。メキシコ小説においては、アグスティン・ヤニェス、フアン・ルルフォ、カルロス・フエンテスの3人が、それぞれ、『嵐がやってくる』、『ペドロ・パラモ』、『最も透明な大地』において、それぞれに手法の違いはあれ、このような形の探究を実践する小説を書いたのである。

○第5報告：ブラジル社会における

ストリートチルドレンの意味

—社会史的考察および社会学的分析—

山田政信（筑波大学・院）

ホベルト・ダマッタは、ブラジル社会を愛情や秩序がありコントロールされた空間や社会集団であるカーザ(Casa)、それと真っ向から対峙する無秩序で闘争的で愛情に欠ける冷酷な世界としてのフーア(Rua)、という二項対立的な概念で捉えている。ストリートチルドレンは、ブラジル社会における規範の共同体としてのカーザには所属しないフーアの人びとであり、しかも年令集団として捉えた場合もカーザの「子ども」とは距離のあるフーアの「メノール(menor)」として認識される。

論者は、先ず社会史の側面からストリートチルドレンという現象を解釈した。また、彼らが身をおいている社会環境を構造的に捉え、彼らが社会的に排出される要因を巨視的要因と微視的要因の二つに分類して考察し、1930年代に始まる輸入代替工業化を目指したブラ

ジルの経済および社会政策が既述の諸要因を規定する重要なメルクマールであったことを指摘した。

○中部日本部会

1996年春の中部日本研究部会は、4月6日午後2時から名古屋大学において、17名が参加して行われた。春季研究会は例年2月か3月に開かれていたが、年度末は慌ただしいので、今回のように4月になってから開催するのも一案である。心なしか落ち着いて報告を聞き、議論できたような気がした。

村田会員による第1報告「コスタリカにおける先住民の教育事情」に対しては、“先住民”の定義について、先住民に対するバイリンガル・バイカルチュラル教育についてなどの質問が出され、むしろ“主流”の人々の側の対先住民意識こそが問題なのではないかといったところまで議論が発展した。

一方川田会員による第2報告「メキシコの聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拝に関する一考察」に対しては、未開拓な分野だけに事実関係の確認を求める質問が多かったが、そんな中でクリオージョのアイデンティティ探求との関わりについて議論が集中したことが興味深かった。

当日の二つの報告要旨は以下にあげるとおりである。 (二村久則)

○第1報告：コスタリカにおける先住民の教育事情

村田敏雄 (名古屋大学・院)

コスタリカの人口の僅か1、2%に過ぎない先住民は、今や非先住民との同化の過程にあり、固有の民族性や伝統文化は存亡の危機にさらされている。また、教育（とくに初等

教育）は先住民に社会参加を促し、国民的な統合を可能にする手段であると同時に、先住民自身の統合・自立を促進させ、先住民を先住民足らしめているものを保持しながら適正な社会開発を実現するための手段であると考えられているが、現実には低い就学率（約30%）、高い留年率（約17%）と中退率（約10%）という問題を抱えている。これらの難問を解決するための有効な方策としてバイリンガル・バイカルチュラル教育が考察され、現在実践の途上にある。

○第2報告：メキシコの聖フェリーペ・

デ・ヘスス崇拝に関する一考察

川田玲子 (愛知県立大学)

聖フェリーペ・デ・ヘスス (1597年に長崎で殉教) 崇拝に関連する歴史的事象をたどっていくと、崇拝が単に宗教というだけではなく植民地時代には政治・社会問題を含むクリオージョの意識とも深く関係していたことが伺える。現在までに収集した文献はそのほとんどが聖フェリーペの生涯を中心に記述されている。本報告では、崇拝の全容を把握するための第1段階として崇拝形成の過程を考察した。

1. 殉教事件30年後の法皇による聖フェリーペの列福やメキシコ市守護聖人としての決定が崇拝の始まりを誘う。
2. カトリック教会の参加は崇拝確立を促す。
3. 崇拝確立後 (17世紀半ば以降)、クリオージョ出身の説教者を中心に崇拝普及のための努力が続けられる。

以上が崇拝形成の大まかな過程といえよう。植民地時代に残された説教集を詳細に分析すれば、当時の聖フェリーペ・デ・ヘスス崇

拜とクリオージョの関係がより明らかになると考える。

○西日本部会

西日本部会は4月6日(土)に神戸大学で実施された。季節はずれの寒さに苦しみながらも、3名の報告をめぐる熱い討論が繰り広げられた。今回の研究会は東日本部会で数年前から実施している修士論文の発表会を西日本部会でも実施することを意図したものであったが、テーマの近接性を考慮して今回はアルゼンチンを中心に修士論文の2つの発表と博士課程での研究の中間報告がひとつという組み合わせとなった。西日本部会でも今後ともこの種の企画を継続させてゆきたいものである。個々の発表についての詳しい議論は紙幅の関係で省略するが、3つの発表とも現地の資料をもとに論文を構成しようとする方法をとっていることは特筆すべきことであり、若手研究者の研究もフィールドワークを不可欠とする時代に突入したことを窺わせた。

(松下 洋)

○第1報告：アイルランド移民から見た

19世紀のアルゼンチン

南井滋野(立命館大学・院)

南ヨーロッパからの移民が押し寄せる以前、アルゼンチンにはすでに建国の基底部形成を支えた人々がいた。アイルランドからの移民である。ジャガイモ飢饉の1840年代から約20年間に3万人程が流入したが、後続はほとんどない。彼らはアルゼンチン牧羊業の主役であり、その安定した発展にはロサス政権の保護があった。北アメリカへ渡ったアイルランド移民は主に本国の政治亡命者をリーダーとしたのに対して、アルゼンチンでは聖職者を

中心にコミュニティが形成された。そこでは、宗教活動、植民活動のための福祉システム、独自の民族教育が短期間に確立された。1860年代からは国際市場での羊毛需要の拡大は、アイリッシュ・コミュニティ内部の階層分化を顕著にし、所属するコミュニティの外に成功の機会を求める階層が出現し、アイルランド移民の意識変容を促すことになった。

○第2報告：イギリスの移民情報局と

南アメリカ

川本真浩(大阪大学・院)

1886年に設立され、第1次大戦勃発まで活動を展開したイギリスの移民情報局(EIO)は、イギリスから海外への移民希望者に対して不偏かつ公正な情報を提供することを目指すものであったが、実際のところ、そこには帝国植民地への移民を誘導しようとする意図が見え隠れしていた。このことは、当時イギリスが金融・貿易面で密接なつながりを持っていた南アメリカ諸国に関する情報提供に顕著に見い出せるのである。

「移民に不適な非公式帝国＝南アメリカ」を陰影に用いた「移民に適した(公式)帝国」像は、当時の代表的な思想のひとつである人種主義の色彩を帯びながら、パンフレットなどの刊行物類やポスターの形でイギリス中に広められた。のちにEIOは南アメリカからの移民勧誘エージェントの動きを直接牽制するまでになる。このようなEIOの活動は、他の帝国プロパガンダとあいまってイギリス人の帝国意識形成にも寄与したといえよう。

○第3報告：第2次世界大戦と

アルゼンチンのナショナリズム

—中立外交をめぐるフリオ・

イラススタの主張を中心に—

陸月規子（神戸大学・院）

第2次世界大戦時、アルゼンチンは米国の対枢軸国断交・参戦要請を内政干渉として拒絶し、長期に亘って中立を維持した。当時の言論界では、中立外交に呼应して反米自立の機運が高揚した。報告では中立外交に理論的に支持しようとした当時のナショナリズム思想を、その中心的論客の一人だったフリオ・イラススタの主張について考察した。彼は、*Nueva República* や FORJA のスラカブリーニ・オルティスが発刊した *Reconquista* 紙への編集協力などを通して、アングロサクソン・プロテスタンティズムに対するヒスパニック・カトリシズムの優位や、ラプラタ地域の大国としてのアルゼンチンを誇示しながら、英国に従属した工業無能な農牧国という自国への劣等感を吐露し、独軍の大攻勢による英国の衰退を歓迎した。こうした主張から、かれの中立主義は、従来の中立外交研究で強調されたタイプの主張（「親独的なゆえに反英米的な」擬似ナチ団体の主張や、反帝国主義を掲げ「反英米的であると同時に反独的な」FORJA）と異なり、「反英米的なるがゆえに親独的な」傾向をもってたと結論づけた。

3. 事務局から

○寄贈図書

三橋利光『コント思想と「ベル・エポック」のブラジル—実証主義教会の活動—』（勁草書房、1996年）。

真鍋周三『トッパック・アマルの反乱に関する研究—その社会経済史的背景の考察—』（神戸商科大学経済研究所、1996年）。

石井陽一『麻薬戦争—南北アメリカの病理—』（創樹社、1996年）。

Joseph M. Luyten, "O renascimento da literatura de cordel no Brasil" 『天理大学学報』第181号（1996年3月）。

『立教大学ラテンアメリカ研究所報』No.23

（1995年）。

編集後記

今号は東、中部、西の各研究部会における発表報告となった。理事会の開催もなくニュース性に乏しかったが、次号は定期大会関連の記事で満載となるので急遽発行することにしたもの。ページ数こそ少なかったものの、主役はお気付きのとおり大学院生である。粗削りの議論もみられるが、西日本部会の松下委員が指摘するように、フィールドワークをベースとした研究が増えており、たのもし限りだ。若手研究者の増加こそ学会の活性化といえるだけに、修士論文、博士論文の発表機会を増やし若手も加えて共同研究の裾野を広げていくべきであろう。

さて私事になるが、この号を最後に編集担当理事をバトンタッチする。1992年8月発行の42号から4年間担当したが、この間に学会のロゴが表紙に登場するなど装いは少しは変わったものの、会員の参加度の高い開かれた会報づくりは「言うは易く実現は難しい」というのが偽らざる実感である。新理事による新しい感覚での編集に期待したいところだ。

最後にこの4年間に協力をいただいた編集委員各位、事務局の原稿を書いていただいた内村さん、さらにいつも気持ち良くタイプ印刷をしてくださったアトムプレス社の篠崎さんに謝意を表して終えたいと思う。

（堀坂浩太郎）

No.57 1996年5月25日発行
〒565 大阪府吹田市千里万博公園内
国立民族学博物館
地域研究企画交流センター気付
日本ラテンアメリカ学会事務局
☎ 06-878-8334
(山田研究室、火-木曜)
Fax 06-878-8353
e-mail yamadajc@idc.
minpaku.ac.jp
☎ 06-878-8343
(菊田事務官)